柳田 茄那子　Violinist

1990年生まれ。2歳2ヶ月より才能教育スズキ・メソードにてヴァイオリンを始める。
11歳で第55回全日本学生音楽コンクール小学生の部東京大会第1位、その後東京芸術劇場『名曲の旅シリーズ』、サントリーホール『第2回こども定期演奏会』にて東京交響楽団と共演し好評を得る。2004年、第58回全日本学生音楽コンクール東京大会中学生の部第2位。2003年、英国湖水地方音楽祭に参加。2006年、東京藝術大学附属音楽高等学校入学。2008年、2009年ロンドンマスタークラスにてジョルジュ・パウク氏のクラスを受講。2008年、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の代表に選出され、第4回国立音楽大学附属音楽高等学校による招待演奏会にて演奏。2009年に東京藝術大学音楽学部に入学。同年、第78回日本音楽コンクールヴァイオリン部門入選。新日本フィルハーモニー交響楽団と共演。東京藝術大学1年在学中、福島育英会より成績優秀者として2010年度『福島賞』を授与。
2010年9月、英国王立音楽院音楽学部にスカラシップを得て留学。在籍中にJ.Water House Award, DM Lloyd Award, Isabel May Walton Award, Hope&Pryor Award,Belmore Woodgate Award などの賞を授与。室内楽にも意欲的に取り組み、特に同級生で結成された Eagle Trio として活動し数々の学内コンサートに起用された。また、イギリス作曲家 Michael Berkley 氏の String Trio を演奏するなど現代音楽にも積極的に取り組む。
2012年、Canary Warf の Clifford Chance にてヴァイオリンリサイタルを行う。その他、在英中Senate House University of London, St Barnabas Church Earling, St Perivale Church, St.Peters Church、Cambridge Master's Lodge 等で度々コンサートを行う。
2013年、ソリストとしてロイヤルアカデミーオーケストラと共演。また学内マスタークラスでは、マキシム・ヴェンゲーロフ、ニン・フェンの各氏に指導を受ける他、国際コンクールにも参加しノミネートされる。2015年には、Cambridge International String Academy に参加し、ロドニー・フレンド、堀米ゆず子の各氏を含む著名な演奏家から指導を受ける。
2014年、英国王立音楽院音楽学部を 1st Class で卒業。その後同大学院に進学し、2016年 Distinction(最優秀)で卒業、RAM Diploma を授与。
2010年渡英し、英国王立音楽院音楽学部、同大学院を経て現在に至る。これまでに、小川有紀子、山崎貴子、ジェラール・プーレ、オレグ・クリサ、澤和樹、ジョルジュ・パウクの各氏に師事。室内楽をジョー・コール、マイケル・デュセクの各氏に師事する他、オーケストラでは、マリン・アルソップ、クリスティアン・ティーレマン、セミョン・ビチュコフ、サー・マークエルダーなどの著名な指揮者のもとで研鑽を積む。

KANAKO YANAGIDA

柳田 茄那子
ヴァイオリン・リサイタル
～ 帰 国 記 念 ～

2017年4月27日(木) 19:00開演　王子ホール

協賛：みずほ銀行　Mercedes-Benz
後援：公益社団法人日本演奏連盟
東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 響親会

マネジメント：ShinEn 新演 03-3561-5012 www.shin-en.jp

～帰国記念ヴァイオリン・リサイタルによせて～

“音楽の本質に迫り、西洋音楽のルーツを正しく理解したい”という探求心と情熱を持って6年間、ロンドンの英国王立音楽院に留学しました。

恩師であるGyorgy Paukジョルジュ・パウク教授との出会いは1998年（当時8歳）、その11年後、再会を機にお声をかけて頂き、ハンガリー・ヴァイオリン楽派の正統的継承者である師の元へ留学を決意しました。

今を生きる私たちには体験することの出来ない激動の時代、音楽と真摯に向かい合い、音楽で生きてこられた師の演奏は、力強く且つ人間味に溢れ、素晴らしく純粋な音色に満たされていました。そこに強く魅了された私は、師の音楽精神、伝統のメソッドを正しく伝承することの大切さを学び、会得することに努めました。また、遠い異文化の地で、日本人として西洋音楽を演奏する意義についても改めて考える機会となりました。

本日、銀座王子ホールにて様々な思いのこもった味わい深い作品を、母国日本で皆様と共有するお時間がもてますことを大変幸せに思います。

柳田茄那子

I would like to wish my very much loved ex student Kanako Yanagida a wonderfully successful and enjoyable concert tonight.
I have had the pleasure to guide her musical development for six years at the Royal Academy in London. She is a highly gifted, charismatic performer who hopefully will have a fine future as a serious musician.

With all best wishes and love,

Gyorgy Pauk

メッセージ：

私は、ロンドンの英国王立音楽院にて、6年間彼女の音楽家としての成長過程に携わることが出来たことを光栄に思います。

彼女は、今後も真摯なクラシック音楽家として道を歩んでいけるであろう、才能とカリスマ性を持っています。

私の親愛なる生徒、柳田茄那子にとって今夜のコンサートが素晴らしい成功に終わり、皆に楽しんで聴いて頂ける演奏会になることを祈っています。
たくさんの愛を込めて。

ジョルジュ・パウク

柳田 茄那子 ヴァイオリン・リサイタル
～ 帰 国 記 念 ～

Program

ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ 第8番 ト長調 作品30-3
Beethoven : sonata for Violin and Piano No.8 G major Op.30-3（1801-1802）

第1楽章　Alleglo assai
第2楽章　Tempo di Menuetto　ma molto moderato egrazioso
第3楽章　Alleglo vivace

シューベルト：ファンタジー ハ長調 D934
Schubert : Fantasy for Violin and Piano C-major D934（1827-1828）

第1部　Andante molto
第2部　Andantino
第3部　Andante molto

…… 休　憩 ……

ショーソン：詩曲 作品25
Chausson : Poeme Op.25（1896）

ルトスワフスキ：パルティータ
Lutoslawski : Partita for Violin and Piano（1984）

第1楽章　Allegro giusto
第2楽章　Ad libitum
第3楽章　Largo
第4楽章　Ad libitum
第5楽章　Presto

パガニーニ：ラ・カンパネラ（ヴァイオリン協奏曲 第2番より）
Paganini : La Campanella from concerto No.2

Program Note　柳田 茄那子

ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ 第8番 ト長調 作品30-3

Beethoven：sonata for Violin and Piano No.8 G major Op.30-3（1801-1802）

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は、古典派後期からロマン派前期に活躍した作曲家で、J.S.バッハ、ブラームスと共にドイツを代表する作曲家“３大B”と称されています。この８番のソナタは、1801年、彼が31歳の時に耳の疾患療養のため滞在していたハイリゲンシュタット(現在：ウィーン19区)にて作曲されました。この時期のベートーヴェンは、聴力をほぼ失っており精神的な苦痛を抱えていました。その絶望感から一時は命を絶つことまで考えたといいます。このソナタ完成４ヶ月後に兄弟に向けて書き記した手紙は、現在『ハイリゲンシュタットの遺書』として有名です。壮絶な苦難にも関わらず、その後、彼は、見事に精神的肉体的な立ち直りを見せ、名曲を次々と生み出し後生を全うしたのです。

第８番ソナタは、過酷な状況とは裏腹に明るく愛らしい作品となっています。ベートーヴェンの印象として起伏が激しく少々怒りっぽいイメージを持つ人もいると思いますが、この曲を聴くとそのイメージが覆されます。曲想はユーモアに溢れ、適度なリラックス感があり彼の気ままな一面も垣間見えると同時に苦難から一瞬解き放たれ音楽に没頭したベートーヴェンの生命力を感じとることが出来るのです。また構成力に優れ、曲調バランスもとても心地よいものがあります。現在ハイリゲンシュタットにはベートーヴェンがよく散歩していたという“ベートーヴェンの小径”が残っていますが、この曲はその美しい自然を彷彿とさせる豊かな楽想に溢れ、シンプルかつ洗練された旋律は聴き手に本質の喜びを与えてくれるものです。ストレートに語りかける、澄みきった美しさがこの曲の最大の魅力であると思います。

作品は、ロシア皇帝アレクサンドル１世に第７番のソナタと共に献呈されています。

第１楽章：原調。ソナタ形式　８分の６拍子。ピアノとヴァイオリンのユニゾンで始まる。
展開部は、イ短調に移調。

第２楽章：緩やかなか緩徐楽章。４分の３拍子。付点リズムが特徴的な複合三部形式。

第３楽章：生き生きとして律動的な最終楽章。４分の２拍子。原調。ロンド形式。

シューベルト：ファンタジー ハ長調 D934

Schubert：Fantasy for Violin and Piano C-major D934（1827-1828）

フランツ・シューベルト(1797-1828)は、ベートーヴェンとほぼ同時期を生きたロマン派前期のオーストリアの作曲家です。ベートーヴェン没後１年後、病により31歳という若さで短い生涯を終えました。ドイツ歌曲の作品に秀でていることから“歌曲王”とも呼ばれ、ゲーテやミュラー、シラーなどの思想を好み、彼らの詩を用いて作曲した作品では、『魔王』、『野ばら』など多数有名です。幼い頃は、ウィーン宮廷礼拝堂の聖歌隊でボーイソプラノ、その後帝室王立寄宿生学校進み、作曲を当時の宮廷学長アントニオ・サリエリに師事、またピアノ、ヴァイオリン他幅広く教養を身につけています。性格的には、表に出るようなタイプではなく、内向的な傾向にありましたが、その謙虚な姿勢は多くの人々に愛され、友人や財政面での強力なパートナーなどには大変恵まれました。当時、その友人たちがシューベルトを囲んで彼の音楽を楽しむ集会は、“シューベルトディアーデ”と呼ばれていました。

この幻想曲は、1827年、彼が亡くなる１年前、30歳の時の作品です。シューベルトがこの曲をヴァイオリン・ソナタとせず、「幻想曲」と名付けたのは、自由な構成と楽想の雰囲気を重んじ、形式の枠を取り外したかったからだろうと思われます。全体が途切れることなく演奏されるのも大きな特徴です。

曲は大きく３つ分けられます。まず第１部はアンダンテ・モルト、ハ長調。ピアノのトレモロ(ハンガリーのチンバロンの音を模倣)で始まり、そこにヴァイオリンが静かに浮かび、幻想的な雰囲気が醸し出されます。その後、アレグレットになり、自由なソナタ形式をとりながら、ボヘミアン的かつ情熱的な旋律とリズムが刻まれていきます。

第２部はアンダンティーノ、変イ長調。ピアノが奏でる甘美な旋律は、1822年に作曲した歌曲『挨拶を送ろう』またの名『口づけを送ろう』(詩はリュッケルト)から転用されたもので、これを主題にして４つの変奏が続きます。とても儚く美しいこのメロディーは、一度聴いたら忘れがたいほどに印象的で、歌曲王シューベルトならでは旋律美が堪能出来るのではないでしょうか。

第３部は再びアンダンテ・モルト、ハ長調。第１部冒頭を再現した後、徐々に熱を帯び、華やかなアレグロ・ヴィヴァーチェに突入します。この主題は、第２部に出てきた変奏曲の主題を変形させたものです。最後に変奏曲の主題が登場し、回想的な雰囲気になると、プレストに切りかわり、明るく力強いクライマックスを築き上げます。

曲全体としては、ハンガリーのジプシーやボヘミアンを意識して作曲されており、この曲に助言し初演を務めたヴァイオリニスト：ヨゼフ・スラヴィーク、ピアニスト共にボヘミア出身だったことも一因であると言われています。この翌年にベートーヴェンの後を追うように彼は亡くなってしまいますが、この曲には、彼の短い生涯の中にあった様々な思い出、手の届かないものへの憧れ、儚い夢、空想などが詰まっていて、まるで幻想の宝石箱のような曲です。また、生前彼が“僕が愛を歌おうとすると愛は苦しみに変わり、苦しみを歌おうとするとそれが愛になるのだ”という言葉を残しているのですがこの曲を通してシューベルトの内向的な部分が垣間見え、その意味が実感できた気がしました。

演奏する際は、両者とも高いコントロール力が求められ、ヴァイオリンパートは音数が多く、ピアノパートもある意味悪魔的とも言える難しさがあり、技術力が求められるグレートマスターピースでもあります。

ショーソン：詩曲 作品25

Chausson：Poeme Op.25（1896）

エルネスト・ショーソン(1855－1899)はフランスの作曲家です。41歳の時に作曲されたこの『詩曲』が最も彼の作品中で有名であり、本来はヴァイオリンと管弦楽のための作品であるがピアノ伴奏の形でも広く親しまれています。作品の特色として抒情味が豊かで熱情に満ち、やや高踏的な傾向があります。また、作品と最終的な関係性は希薄になってしまったものの、この作品はロシアの小説家イワン・ソルゲーネフの小説『恋の凱歌』(またの名を『愛の勝利の歌』)から少なからずインスピレーションを受けています。小説の内容は、ルネサンス時代のイタリアを舞台とした一人の女性を巡る、画家と音楽家の三角関係が生み出す愛憎劇であり、初めは画家の手に渡った彼女を取り戻そうと長旅から帰還した音楽家が“勝ち誇れる愛の歌”なるものを奏でた途端、

彼女は彼の虜になり、しまいには始め勝利したはずの画家が決闘の末命を落とし、音楽家が彼女の愛を勝ち取る、という何ともどろどろとした愛憎物語なのです。

残念なことにこの作品が仕上がった頃には、この小説を基とした交響詩の要素は少し影を潜め、より曲の神秘性を追求していくことに重点を置いたショーソンはヴァイオリンが主体となる形へと考えを変えて作曲を進めました。この大曲とも小品とも言い難い長さの楽曲の中で、５つのパートがソナタアレグロフォームで主題－第１、第２提示部－展開部－再現部－終結部、と抒情的な美しい旋律で交響楽的に進行していくところ、かつ強い情熱と変ホ短調による弦楽器の独特なくすんだ音色をうまく利用して非常に変化の多い陰影を生み出しているところから彼が『詩曲』という名を思いついたと言われています。

作品は、初演を務めたベルギーの名ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイに献呈されました。また、ショーソンはこの作品完成３年後パリ郊外の別荘近くで自転車事故のため死去、44歳で生涯を終えました。自筆譜は、イザイがその後ヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラーに寄贈し、現在はアメリカ国会図書館に所蔵されています。

ルトスワフスキ：パルティータ

Lutoslawski：Partita for Violin and Piano（1984）

ヴィトルト・ルトスワフスキ(1913-1994)は、ワルシャワ生まれポーランドの近現代作曲家です。音楽に理解のある両親のもとに恵まれ、小さい頃から、ピアノ、ヴァイオリンを習得、その後作曲に目覚め、ワルシャワ音楽学校にてリムスキー＝コルサコフに師事しました。彼の作風は、生涯を通して変化があり、第二次世界大戦以前は、新古典派主義的、大戦後は、民族主義的に傾倒し、1960年以降は偶然性を取り入れた前衛的な音楽を作曲しました。

20世紀のポーランドは、政治的に大変過酷な状況にあり、ナチスによる占領、戦後のソ連による支配で文化面、芸術面への制限、弾圧がありました。実際彼が作曲した初の交響曲も社会リアリズムの指針によって形式主義(音楽美学用語：ソ連時代は、国家への称賛を取り入れず前衛的な形式に傾倒した作品は大衆への訴えかけが不十分とされた。)と見なされ作品の出版、上演共に禁止されました。ルトスワフスキは、スターリン没後、ソ連政府の文化的抑制に屈しないことを公的に表明し、母国ポーランドも欧州の中でいち早く前衛的な芸術への理解を示し現代音楽擁護のパイオニアとなったのです。

このパルティータは、1984年にヴァイオリニスト、ピンカスズッカーマンと指揮者マークナイケルグのリクエストによって作曲されました。作品は、５楽章から成り、第１、第３、第５楽章がメインパート、第２、第４楽章、また第５楽章の冒頭には、彼特有の作曲技法ad-lib奏法：アドリブ＝自由に、が用いられています。この指示が記載された一定の小節間、ピアノとヴァイオリンは、通常のように同じ小節や拍の音符を追うことなく、互いにそれぞれ異なったテンポ、フレーズで弾き進めることになり、非常に即興的な音楽が生まれます。これによって各パートの旋律が浮かび上がるため現代曲の時代における斬新なポリフォニー(多声音楽)を生み出したとされています。

彼特有の独特な優美さと緊張感、空虚感が入り混じった本作品から、まるで戦争フィルムを見ているような感覚と彼の心奥深くに潜む反骨精神、そして戦時中の激動の時代を走り抜けた生と死ぎりぎりの切迫感などを感じ取ることが出来るのではないかと思います。

パガニーニ：ラ・カンパネラ（ヴァイオリン協奏曲 第2番より）

Paganini：La Campanella from concerto No.2

ニコロ・パガニーニ(1782-1840)は、イタリアのヴァイオリニスト、ギタリスト、作曲家であり、超絶技巧奏者として名高い人です。当時彼の演奏会は大人気で、新作を発表する度に話題となり、同時期に活動していた音楽家や作曲家達は彼に少なからず影響を受けています。ピアニスト兼作曲家でもあるフランツ・リストが彼の演奏に魅了され『私はピアノのパガニーニになる』と宣言し作曲したピアノ曲“パガニーニによる超絶技巧練習曲ラ・カンパネラ”は今でも演奏機会の多い作品であり大変親しまれています。また、近代ではルトスワフスキも“２台ピアノによるパガニーニの主題による変奏曲”を残しています。本日演奏いたしますシューベルトもパガニーニと同時期を生きた作曲家で、イタリアオペラを好んでいたこともあり、家財道具を売ってまで彼の高いチケットを手に入れ会場に足を運びました。その演奏会で彼が聴いた新作がこのラ・カンパネラだったのです。

黒いタキシードに長髪、妖艶な容姿で高度な技巧曲を演奏する姿は時に悪魔的とも言われ、その技術は悪魔に魂を売り渡した代償に手に入れたものだというオカルト的な噂がたったほどでした。また、その風評により、没後、どこの教会も彼の埋葬を引き受けたがらなかったといいます。

この作品は、単独で演奏されることが頻繁ですが、ヴァイオリン協奏曲第２番の最終楽章でもあります。独奏ヴァイオリンが示すロンドの主題から始まり、ヴァイオリンのフラジオレットによる鐘の模倣と伴奏との掛け合いがあり、半ば過ぎた頃には、“シューベルトが天使の声を聞いた”との言葉を残した美しいカンタービレがあります。テクニック要素としては、極めて早いパッセージのダブルストップ、左手で連続して弦を弾くピチカート、２声フラジオレットなどがあり、奏者に高い技術を要求する難度の高い曲でもあります。

居福 健太郎　Pianist

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て同大学院修士課程修了。大学院修了ピアノ演奏優秀者による安川記念ジョイントリサイタル(浜離宮朝日ホール)に選出される。第４回浜松国際ピアノアカデミーコンクール第２位、及び特別審査員賞受賞、第５回東京音楽コンクール第３位をはじめ、多くのコンクールで入賞を果たしている。これまでに日本フィル、セントラル愛知交響楽団、仙台フィルをはじめ数多くのオーケストラとの共演。2014年、都民芸術フェスティバルオーケストラシリーズにてソリストとして飯守泰次郎指揮、東京交響楽団と共演。国内各地で充実した演奏活動を展開している。室内楽奏者としてユルンヤーコプ・ティム(ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団首席奏者)、五嶋龍、戸田弥生、山崎伸子、松山冴花との共演や、小菅優とのピアノデュオをはじめ、多くの奏者から強い信頼を得ている。また歌曲伴奏にも積極的に取り組んでおり、第17回友愛ドイツ歌曲(リート)コンクール優秀共演者賞受賞。後進の指導にも力を入れており、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校非常勤講師を経て、現在、東京藝術大学非常勤講師。